

名誉会員 齋藤常正先生を偲ぶ

西 弘嗣・高嶋礼詩



東北大学の名誉教授であり、古生物学会元会長の齋藤常正先生は、令和2年8月1日17時33分にご逝去されました。享年84歳でした。

齋藤先生は、1954年に東北大学理学部に入学し、1958年に東北大学大学院理学研究科地学専攻に進学されました。齋藤先生が進学された当時、日本の古生物学会は大型化石の研究が主流であり、微化石ではフズリナ化石が全盛期でした。小型の底生有孔虫の研究は、東北大学の浅野清教授が精力的に進めていましたが、浮遊性有孔虫に関してはほとんど研究されていませんでした。一方、世界ではH. Bolliなどが浮遊性有孔虫の研究を開始し、A. R. Loeblich, H. Tappanらとともに「Studies in Foraminifera」を1957年に出版しました。この本に大きな影響を受けた齋藤先生は、日本でも浮遊性有孔虫の化石層序ができると確信し、手始めに静岡県掛川地域から研究を開始しました。そして、1963年の学位論文では、早くも我が国の中新世の浮遊性有孔虫化石層序を総括し、同年に東北大学の理科研究報告として「Miocene planktonic foraminifera from Honshu, Japan」を出版しました。これが我が国で最初の浮遊性有孔虫化石層序の総括的な論文です。これ以外にも、1962年に高知の登層や母島などから産出した浮遊有孔虫を記載しました。その中には*Globorotalia tosaensis*, *Orbulinoides beckmanni*など、現在も使用されている重要な示準化石が含まれています。まさに、日本における浮遊性有孔虫の研究は、齋藤先生によって始められたといえます。

齋藤先生の御活躍は、渡米されてからさらに加速されました。日本学術振興会の奨励研究員を経て、1963年に世界を代表する海洋学研究機関の一つである、コロンビア大学付属ラモント・ドハティ地質学研究所にポスドクとして採用されました。翌年には正規の研究職として採用され、1969年には主任研究員に昇格しました。このとき、ラモントではW. M. Ewing所長の元で海洋調査が盛んに行われており、多くの航海に参加されたそうです。当時の調査船はそれほど大きくなく、航海は大揺れになることも多かったのですが、先生は船にはとても強く、船酔いはしたことがないと語っておられました。当時、海底から採取されたコア試料は、貴重で新知見が多く、先生の論文もScience, Nature誌などに多く掲載されました。ラモントでは、齋藤先生が船上でコア試料の年代を次々と決定していったと聞いています。

1960年代末になると、海洋底の研究がさらに盛んになり、深海掘削計画が開始されます。先生は、当時の浮遊性有孔虫研究者の代表として、W. A. Berggren, E. A. Pessagno, W. H. Blowなどとともに浮遊性有孔虫による層序の基準を検討したそうです。最初の航海であるLeg 1にも先生の参加が予定されていましたが、ラモントの参加者が多いということで、W. Berggrenに交代となりました。この当時の記録は、地質学論集の第49号(33–42, 1983年)に書かれていますので、ぜひご覧ください。その後、1968年のDeep Sea Drilling Project(国際深海掘削計画)の第3次航海(Leg 3)に齋藤先生は参加することになりました。この航海では、プレートテクトニクス理論の正しさを証明するため、海嶺から遠ざかるほど海底年齢が古くなるという事実を実証することが主要な目的とされました。齋藤先生は、浮遊性有孔虫化石を用いて海洋底の年代が中央海嶺から離れるにつれて古くなることを、船上で証明しました。これにより、地球物理学、古生物学、地質学が共同で研究するという新しい研究方向が確立されたといえます。海洋底の研究が進み、浮遊性有孔虫の生層序や古環境指標における有効性が注目されるようになると、先生は新生代の層序区分や示準面に関して多くの論文を出版され、世界のリーダーシップを取るようになりました。また、1970年代からは氷期の地球の表層環境を復元するCLIMAP Projectが開始されましたが、この計画の基になる浮遊性有孔虫の群集解析にも先生は大きな貢献をなさいました。このとき使った分類基準が「Systematic Index of Recent and Pleistocene Planktonic Foraminifera」(1981年出版)として、まとめられました。

これ以外にも、重要な研究として1974年に出版した浮遊性有孔虫殻の酸素同位体比を用いて、白亜紀から新生代の浮遊性種の生息深度を明らかにした論文があります。学位論文のときに東北大学教授の半沢先生から、なぜ浮遊性だとわかるのかと質問され、それを証明したい

とずっと考えていたそうです。酸素同位体比を使い、生息深度を議論したのは齋藤先生の論文が最初であったと思います。

1970年からは、世界的な研究機関であるニューヨーク市アメリカ自然史博物館の微古生物学出版部長を併任し、この分野でのトップレベル国際誌である *Micropaleontology* 誌の編集長を7年間勤められました。有孔虫の分類学に関しては、中生代から新生代にかけての浮遊性有孔虫化石の分類をまとめた「*Catalogue of planktonic foraminifera*」全6巻（1976–1980年出版）の編集・執筆を行いました。このシリーズは、現在でも浮遊性有孔虫化石の分類学研究の教科書的存在です。

1977年に山形大学教授として帰国後は、新たに設置された地球科学教室の立ち上げや教育理念の構築に貢献し、1990年に東北大学理学部教授に転任後は、国際共同研究を主催して、日本全国の若手研究者の育成に尽力し、DSDP, IPOD, ODPと続く深海掘削計画の継続にも国際委員として大きな貢献を致しました。このような一

連の研究業績により、1977年に古生物学会学術賞、1998年に地質学会賞、2001年に日本古生物学会賞（横山賞）を受賞されました。同時に、日本古生物学会、日本地質学会などの会長、評議員や欧文誌の共同編集長などとして、これらの学会の国際化に貢献し、文部省などの各種委員としても活躍されました。日本古生物学会では1995年2月から1997年1月まで会長を務められ、1997年から1999年まで日本学術会議17期会員となりました。国外でもアメリカ地質学会Fellow、*Micropaleontology* 編集長、*Catalogue of Foraminifera* 編集長、*Catalogue of Ostracoda* 編集長、*Catalogue of Planktonic Foraminifera* 編集長、*Journal of Foraminiferal Research* 編集委員、国際地質学連合（IUGS）白亜紀小委員会委員など、枚挙にいとまがありません。最近では、2018年に地球惑星連合のフェローに選出され、表彰式に出席されたのが、先生が公式の場に出席された最後の機会となってしまいました。輝かしい数々の業績を残され、地球科学の進展に大きく貢献された齋藤常正先生のご冥福をお祈り申し上げます。

